

父のいる光景

Katsura Morimura

森村 桂



中央公論社

父のいる光景

Katsura Morimura

森村 桂



父のいる光景

1993年 1 月 7 日初版発行

1993年 3 月 5 日再版発行

著 者 森 村 桂

発行者 嶋 中 鵬 二

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋 2-8-7

振 替 東京 2-34

©1993

Printed in Japan

ISBN4-12-002180-7

印刷所 三晃印刷

製本所 小泉製本

父のいる光景
目次

さくら色の着物

7

桃の花びら

21

不思議な食べもの

35

父の秘密

50

ハッピーエンドがいちばん

59

踊り場のある家

73

よろしくは、いや

86

赤い屋根の家

97

こがね虫は金持だ

104

ワルツのあぶら

112

父の特技

124

母の病気

136

銀色ケースの夢

153

勉強しろって、いわないで

164

「好きな絵」

171

人生は計算ではない

183

明日との別れ

196

遺された日々

208

お墓より本が先

226

カ
バ
ー
・
扉
画
森
村
桂

父の
いる
光景

さくら色の着物

「桂子^{かっ子}や！ 桂子！」

だみ声のまじった、いつもの強くするどい祖母の声を、ああ、いやだなァ、とほんやり聞きながら、私はまだ、目がさめきつていなかった。終戦の年、五歳の秋のことである。

私が知ってる「祖」と名のつく人は、この父の母親だけだった。たしか私が七歳の年まで生きていたように思う。

大人になってからこの人のことを聞いた話では、何でも、川向うの二合半領といわれる豊かな土地の剣道の達人の娘。明治女学校で藤村や透谷の講義を受け、一時は文学の道を志したことがあるという。十二歳の年にある医学生に見初められたのだが、今と違って、恋などというものは、そう簡単に成就するものではない。彼女は、二度結婚するが二度ともとび出し、かねてから知っていた祖父との結婚を強く望んだという。

豊田家は代々医者で、祖父は十二代目。

祖母がお嫁にきた時は、坐っている床の下の地面まで、他人のものだったという。医者になるにはお金がかかる。しかし診察代はお米や大根。しかも、ほとんどの病気が栄養失調がもとの時代のこと、豊田家の家訓は「薬より食」、ともかく栄養のあるものを患者に与えるうちに、どんな貧乏になったという次第。

祖父は一時、借金のカタに聴診器まで持っていかれたが、何事にも逆らわないタチの祖父は、患者である子供の顔や舌を診るだけで診断し、その名医ぶりが評判になり、それを伝え聞いた恩師佐々木博士が、

「医者は育てたが、易者は育てた覚えはない」

と怒って破門をいい渡したが、あまりの窮状に、逆に助け舟を出した、という“伝説”をはじめ、貧乏話は種が付きない。

祖父の窮状を知る祖母の両親は、三度目の娘の嫁入りに、たくさんの持参金をもたせたため、豊田家はもちなおし、医院も繁昌したらしい。

だが、九人目の子供が生れてからまもなく、祖父は床につくようになり、医院は廃業してしま

う。

そして、その頃は、祖母の実家も代が替り、没落していた。

「ねえ、お父さん、作家になってなかったら、何になってた？」

ある時、聞いたことがある。その時父は感慨深げにいったものだ。

「お父さんは、ほんとに、小僧に行くはずだったんだよ」

「小僧!? お寺の?」

「医療器具の間屋だった。何しろ三男だったからね」

医者を経ぐはずの長兄は病死した。やさしい人だったという。その長兄が死んだのは、父が小学校を出る年だった。

小学校を出た父は、予定通り、下町の医療器具の間屋に、小僧として出された。店の奥の暗い四畳半のはしご段を下りてくる主人の足が、目にやきついてはなれないと、父はいつていた。その「足」が、今度は「全身」になって姿をあらわした時から、父は、問屋の奉公人として、長い年月を過すことになる筈だった。

私同様怠けもので、そのくせ要領が悪く、風邪をひきやすく意気地なしの父に、その職がつとまったかどうか。

しかし、父は、そのはしご段から降り立った主人の「全身」を見なかった。店の戸がガラッとあくよりも早く、

「三郎!」

という、母親の、まだつやややかではあったろうが、だみ声のまじったかん高い声によって、新しい運命が告げられたのだ。

地方の貧乏医者の三男として生れた父に、いちばん好きだった長兄が死んだ時から、学問へのチャンスがきた。身体の弱い夫にはもはや期待せず、頭のいい長男に一家の将来をたくしきって

いた母親は、長男が死んではじめて、三男の三郎の存在に気がついた。三男とはいえ、もはや二男と同じ。学問をさせてもいいのではないだろうか。

三男の卒業式の日、母親は意を決し、ひとり、はじめて家をあげ、旅に出た。埼玉から東京に住む佐々木博士を訪ねたのだ。この人は、彼女の若くして亡くなった初恋の人とゆかりのある人でもあった。

博士はあいにく留守。げんな顔で応対する家人や書生たちの前で、母親はひるむことなく、旅館に部屋をとり、逗留した。数日して、博士が帰り、母親は正式に博士の客として迎えられた。博士は、奨学資金を出す約束をした。母親はすぐに家に帰ったが、しかし、三男はすでに発っていた。そこで、「旅のワラジ」もとかず、そのまま、人力車で駅にとって返したのである。

この医療器具の問屋の一件の話を聞いた時、私は、こんな気のきかない男が小僧になどなつたら、今でもまだのれん分けしてもらっている筈がないから、私も、そこで下働きの娘として働いていなければならぬことを思って、胸をなで下したが、しかし、一方では、もし作家になっていなかったら……という娘の発想の時に、こんな話をもち出して、自分は運が良かったのだと喜んでみせる父を、この男には、野心というものがないのかと、いささか心もとない思いをもったものだった。

さて、三男である父の運命を好転させた母、私の祖母にあたる人物は、しかし子供心に、いや、この人が死んだあとでさえも、どうしても私の好きになれない人物だった。

医学生の初恋の人がいたなんて、聞いただけで、何となくロマンチックである。その人物と、この口をへの字に結んだ四角い顔の女は、イメージとして、結びつきようがなかった。娘時代は「おかめ」で可愛かったというが、しかし、およそ美とは関係のない、鬼たちからならば、したわれそうな女だった。

埼玉の田舎の、その家だけは、何故かたいへんハイカラな和洋折衷の赤い屋根の家の中で、この鬼に好かれそうな女は、一日中大声で人を呼び、指図をしていた。この家のお嫁さんが、私がここに連れられてくる前、結核で亡くなったのも、こう朝から晩までがなりたてている祖母がいたのでは、無理からぬことと、幼心に私は思ったものだった。何しろ、その伯母は、この家にしては珍しく、色が白く、やさしい人だったから。

そう……、どうも、この家では、やさしいという人だけが、早く亡くなっていくように思えてならない。父も伯母も、亡くなった兄や、兄嫁、あるいは、甥の話をする時など、

「とても、やさしい人だよ。あの人が生きてれば、お前をとっても可愛がってくれただろうね」といういい方をした。

それは、亡くなった人へのいたわりと畏れも入っているのだろうが、実感にも、思えてならない。大家族の家では健康で気丈な者、人を傷つけても自分は傷つかない者のみが生きのこっている。

伯父は、小学生たちから、「サンマの目だま」とかげ口される中学の校長だった。しかし、姪を可愛がるような人ではなかった。私よりいくつか上のひとり娘がいた。しかし、この娘は学校

の成績もよく、本家のあととり娘として何不自由なく育つたために、まだ小学校へも行かない身でありながら、この家に独り身をおいている従妹の私の心細さを思いやるなどという発想を持たなかった。その少女は、亡き母親に似て、色が白くきれいな顔だちをしていた。しかし、目は細く白目がちで、少女には珍しい一本の銀歯が、私はこわかった。この美しい少女が、暗い家で二人だけになった時、突然ククッと笑いそうな気がした。

だが、少女は笑わなかった。思えば彼女は彼女なりに母親を失って孤独だったのだ。白いセーラー服を着た彼女は、いつも、家の中心にあたる座敷から、広縁をつきつて、よく日の当る自分の部屋である洋間に入っていた。そのあとを、口こそへの字だがニコニコ顔の祖母がつづいていく。その祖母は、私の顔をみると、その表情を変えた。声も、変った。

「桂子や」

この声を聞いたたびに、幼い私は、ピクンとすくんだ。声も不快なら、その心情も不快に思える。そして、何よりも、私は、両親が自分につけてくれた桂^{かつら}という名に、「子」をつけることが許せなかった。しかも「ちゃん」とつけるべきところを「や」という。

老人というものが、早く死ぬことが、私の救いだった。しかし、この家では、若い伯母が先に死んでいる。あまり望みはなかった。

この祖母が、池をのぞいていたりする時、落ちればいいなど、私は願ったものだ。しかし、彼女の足はしかと土をふみしめ、ふりかえって、どなった。

「桂子や」

「桂子や、桂子や」

起きなければいけない……、もう起きているのだ。こうして起き上り……あとは、立ち上ればいいだけではないか……。ふとんの上にすわりこんだまま、目が半開きであった私は、その私を呼ぶ祖母の声が、今朝に限って、ひどくはずみ、何かいいしらせを告げる声のように聞えるのを妙に思った。

「桂子や、桂子……」

ふすまがあいた。祖母が、まだふとんにいる私を見てあきれたような一呼吸があった。しかし、それが、けわしいものではなかった。

「桂子や、お父さんが帰って来たよ」

その声を背中では、私は受けとめた。お父さんが、帰って来た——。家の中が騒々しいのがわかる。お父さんが帰ってきた！

「いやだねえ、この子はねぼけてて、聞えないのかい、桂子、お父さんが帰ってきたんだよ」

ねぼけてなんかいなかった。はっきりわかっていた。ただ、私は、その背中でせいっぱい受けとめていたかった。ふり返るのがこわかった。

私はネマキのまま走り出た。しかし、どこにも父はいなかった。私は外に出た。

黄ばみかかった稲田を背にして、兵隊服を着た父の上半身が浮んでいた。その笑い顔は、私の求めていた幸せというものの、全てを運んで来た人のものだった。

ひたいの美しい鼻すじの通った父の顔、こんなに美しい男の顔を、私はその後みることはない。この世のオールマイティとも思えるものだった。そう、幼い兄を抱えて、結核の再発した母は、疎開先の浦和で病いと食料難と闘っているのだ。父さえ帰ってくれば、もう、何の不安もないのだ。長い長い、こわかった、寂しかった戦争は終わったのだ。お父さんが帰ってきたのだもの。

母家にもどった私は、一族中が、父の帰りを祝っている筈だ、それに酔いしれている筈だと信じていた。たまたまであつたのか、それとも、父が帰るのをすでに知っていてであつたのか、この本家には、父の四人の姉妹のうち、二人が子供を連れて、泊っていた。

茶の間のふすまをあけた私は、叔母たちが、背を丸め、いかにもおいしくてたまらなそうに、ごはんを食べているのを見て、げげんに思った。彼女らはまっ白な、たきたてのごはんに、羊かんを厚切りにしてのせて、食べていた。羊かんは、父の土産であつた。

ごくり、ごくりとのどをならすようにして食べる叔母たちの丸い背をみて、私は、たまらない不信任がつきあげるのを感じた。

お父さんが帰った。なのに、この、父の妹たちは、そのそばにつきまといもせず、土産の羊かんを、待ちきれないかんじで食べている。それも、切って菓子皿で、フォークで食べるという当り前なことをせず、ごはんにのせて食べている。

私は、父の羊かんを、このようにして食べる叔母たちを、汚く凄まじいと思った。こんな女たちの中で育った父を哀れだと思った。

妹たちにとっては、兄は帰って来さえすればよく、劇的な対面などというものは、その娘をび